

## 『医療者の心を贈るコミュニケーション 患者さんと一緒に歩きたい』

日下隼人 著

本書は医療現場でのコミュニケーションについて、特に医師が患者さんとよいコミュニケーションをとるためにどうするか、患者さん側に視点を移して述べられている。

著者の日下隼人先生は、武蔵野赤十字病院で評者が臨床研修医として小児科をローテイトしていたときの指導医であった。先生の朝のラウンド開始は早く、終わるとナースステーションに戻って、その輪に入るわけではないが、看護師さんの申し送りを聞いていらっしやったことをよく覚えている。患者さんの前日からの症状の変化や、患者さんや患者さんのご家族が医師に話さないことを、時間をかけずに知ることができた。

本書は52章にわかれ、最初の11章までが「聴く」こと、12章から25章までは「言葉」による説明、26章から41章までが患者さんと一緒に考えていこうとする「心を贈る」こと、42章からが「在宅期・終末期」、47章からが「医療者の心を贈る」チーム医療となっている。小見出しがついているため、自分が気になるキーワードを探して、どこからでも読み始めることができる。

あとがきに「重い病気の子どもやその親たちと接する日々の中で、私は人と人とのつきあい＝コミュニケーションについて考えないわけにはいきませんでした」とあるが、著者の長い臨床経験に基づく具体的な例が多いため、理解しやすく、その想いも伝わってくる。「『時間がない』という医療者がいますが、ここで少し時間をかけることでその後の関係がうまくいけば、話が伝わらなかったために生まれる二度手間、三度手間や苦情が防げますので、結局は時間が少なくて済む」というこ



A5判, 164頁  
1,800円＋税  
刊行：2016年2月  
医歯薬出版株式会社

とも、実際の経験からの助言だと思われる。

また、すぐ使えるマニュアル的な内容も「コメント」にまとめられていて、患者さんを不快にしまう可能性を減らせるヒントがたくさんある。評者自身、なかなか「心を贈る」ことはできないかもしれないが、今日から「どうですか」を「いかがですか」に、「呼ばれますから」を「お呼びいたしますので」という言い方に変えてみようと思う。

今からコミュニケーションについて学びたいので、読みやすい本をと思っている方にもお勧めするが、コミュニケーションについて考える「時間がない」と思っている医療者の方に、ぜひ1度手にとって、気になった1章でも読んで頂きたい。そして、患者さんの話を「聴く」態度、説明の「言葉」を少しでも変えるきっかけになれば嬉しく思う。

古野 薫

(国立病院機構東京医療センター)  
リハビリテーション科医長